辻泉 准教授

Izumi Tsuji

情報づけの時代を生き抜け

情報化社会にヒントをもたらすファンとオタク

辻先生の研究対象は「情報の受け手」。特に、メディアの情報を独自の発想で使いこなし、自分なりの楽しみを満喫する「ファン」や「オタク」の存在に注目している。「雑誌を切り抜いて交換したり、アイドルの写真を貼ったネームカードを自作して共通の好みを持つ人を探したり。〝ファン〟や〝オタク〟と呼ばれる熱心な受け手は、通常人が思いもつかないような、独創的な情報の使いこなし方を生み出しています。彼ら／彼女らは、情報化社会のライフスタイルを考える上で、多くのヒントをもたらす存在だと思います」

こうした「ファン」や「オタク」を研究するために、先生はフィールドワークとしてコンサート会場で開かれるアイドルファンの集会に参加したり、鉄道オタクと一緒にさまざまな路線を「乗り鉄」したりするそうだ。しかも、先生自身が筋金入りのアイドルファンかつ鉄道オタク。趣味と実益を兼ねた、楽しそうな研究である。実は、先生には研究者として大切にしているものがある。「当事者視点」だ。

交通博物館閉館（2006年5月）イベントにおける、辻先生のフィールドワークの様子。

「当事者」の視線に基づいて研究し、発言する

先生は大学院時代、社会学者の宮台真司教授の指導を受けた。そこで、「一般の人と同じ目線に立たないとリアリティのある発言はできないけれど、一般の人と同じ行動をしていたら研究者である意味がない。あくまでも普通の生活をしながら、研究者としてのフィルターを通して現象を見つめ提言する、そうした〝当事者性〟が大切」と叩き込まれる。以後、「当事者視点」は、先生の揺るがない指針となっていく。また、それまで雑誌など「情報を発信する側」を研究対象として見ていた先生に宮台教授は、「情報を受けて実際に使いこなしている存在の方が、対象として面白い」とアドバイスする。マスコミなどの情報発信者が考えるほど、簡単に世の中は動かない。むしろ、受け手が情報をどう受け取っているのかの実態を追究するべきなのではないか、と示唆されたのだ。この指摘で視線が切り替わった、と先生は振り返る。「説得力のある発言をし、その内容に責任を持つためには、テーマを自分のこととして受け止め、関わる必要があります。ファンやオタクは、僕が当事者視点を持つのに最適なテーマ。生活者と研究者、両者のバランス感覚を大切にしながら研究を行っています」と先生は語った。

携帯電話がもたらす、似た者同士の人間関係

先生が現在取り組んでいる研究の一つが、「ユーザーの視点から各種メディアの利用実態を明らかにする」というもの。先生は、「現代では気を付けないと、ユーザーがメディアに〝使われる〟可能性がある」と指摘する。それは一体どういうことなのだろうか。

メディアを使っているうちに思考停止に陥る状態、と先生は説明する。「例えば携帯電話は、友人関係の〝同質化〟を引き起こすことが考えられます。今、若者層の友達づくりは携帯メールのアドレス交換が第一歩。大学だと、新入生歓迎会や初回の必修授業などに参加すれば、たくさんのアドレスを手に入れることができます。携帯電話に多くの連絡先が登録されて、友達が増えた気がする。しかし実際は、気が合わない相手のアドレスを消していくので、結果的には同質の友達しか残らない。自分では携帯電話を使いこなして友達を増やしたつもりかもしれないけれど、多様な友達がいる、という状態にはならないんです」それが携帯電話というメディアに頼った友達づくりの問題点であり、思考停止に陥っている場合に起こる現象だと考えられる、と先生は語る。そして、この状況に気づかないと、自分とは異質なものを受け入れられなくなります、と先生は続けた。

「自分を磨くためには、サッカーに例えると〝ホーム〟と〝アウェー〟の両方が必要なんです。アウェーは違う者同士だということが前提の場。緊張するし気も遣うけれど、お互いを尊重し合って高め合える関係ができる。何より、自分は人と違っていい、ということがわかる。思考停止に陥ることで、こうした場を持つ機会がなくなる。視野を広げることができなくなってしまうんです」

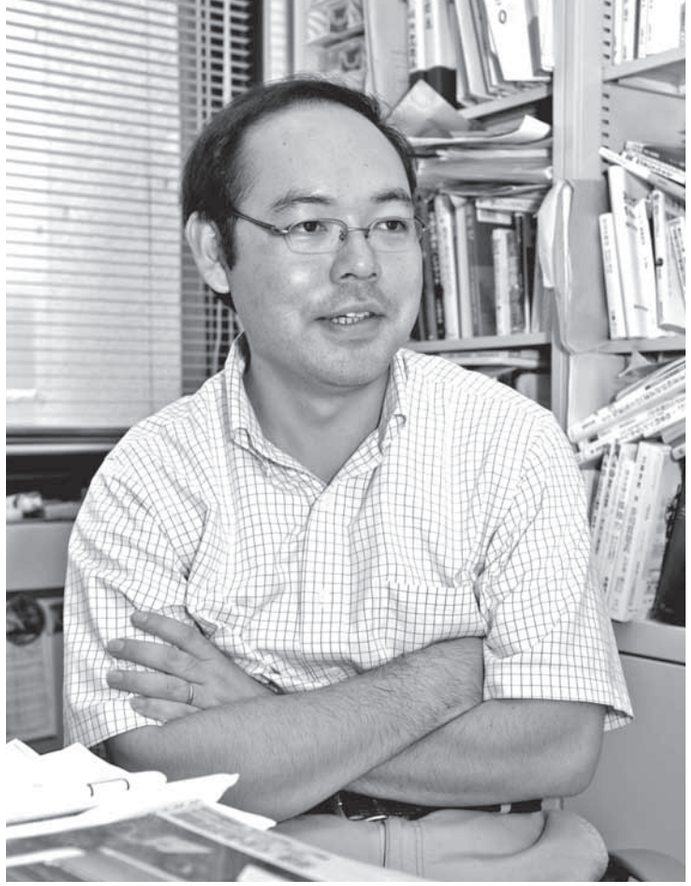
メディアに「使われない」処方箋とは

では、思考停止に陥らずに、メディアを「使いこなす」ためにはどうしたらいいのだろうか。先生は、二段階の方策を提示してくれた。

「最初の段階は〝手放す〟。携帯電話やインターネット、テレビも雑誌も見ない生活を体験してみる。その時、暮らしにどんな影響があるのか、自分はどんな気持ちになり行動するのかを冷静に観察することが大切です」やはり必要、という結論に落ち着くとしても、一度手放すことで、メディアが自分の暮らしのどんなところに役立っているのかが把握できる。それが重要なのだ。

そして次の段階。「今まで自分が触れたことのないものに出会うことです。〝新しいものと出会う〟際に、インターネットはとても優れたツールなのですが、探し方に慣れていないと結局知っていることを〝再検索〟することになりかねません。それならばむしろ、旅に出るくらいの思い切りのある行動をした方がいい」ここでのポイントは「一人で出かける」こと。友達と一緒だと、それまでの生活の延長になってしまうためだ。

また、より気軽にできる方法として、先生は「本屋を歩く」ことも提



辻先生も参加した共著

案してくれた。「自分の好みを忘れて、普段は見ることのないコーナーものぞくと良いと思います。世の中には自分の知らないことが山ほどある、と肌で感じられる。もし興味を惹かれるテーマを見つけたら、その本を読むことが一番ですが、インターネットで関連情報を検索してみてもいい」

インターネットなどのデジタルメディアに慣れ切った今、ときにはアナログな場に自分を置く。こうした「デジタルとアナログの往復運動」で、自分とは異なるものと出会い、メディアが伝える内容とはまた違うリアルな現実に触れて、情報を鵜飲みにする思考停止状態を防ぐ。情報の洪水の中でメディアに飲み込まれず「使いこなす」には、こうした行動が有効だと思う、と先生は語った。

模範解答はアウト。思考力と当事者視点を磨く

思考回路を常に動かす。このため先生の授業は、徹底的に「考えさせる」スタイルで成り立っている。「AとBの二つの論を並べて学生に選ばせ、その理由もしっかり答えてもらいます」理由についても模範解答では済ませない、と先生は言い切る。予定調和的で出すのが楽な模範解答ではなく、学生が自らの頭をフルに使って出した答えを、先生は要求する。

また、先生自身が宮台教授から教わったように、学生の中の「当事者視点」を磨くことも先生は大切にしている。先生のゼミでは、どんなテーマを研究対象にしてもいい。条件はただ一つ、「当事者性があること」。最初は優等生的なテーマを選ぶ学生が多いんです、と先生は笑う。「却下します、つまらないよと。君が本当に興味のあるものを選んでごらん、とアドバイスする。すると、〝こんな内容でいいんですか〟なんて言いながら、サッカーやコスプレなど、自由にテーマを選んできます」そして先生は、「なぜ、自分はこのテーマに興味を抱くのか」を客観的に考えるよう学生を指導する。「自分はどんな人間なのか」を把握した上で、「自分を成り立たせているこの環境はどんな社会なのか」を見つめるよう学生を導いているのだ。これは学生にとって少ししんどい作業かもしれません、と先生は言う。「けれど、この地点を乗り越えた学生は着実に成長する。やはり、〝本当にこれが好き、追究したい〟という思いは力になるんです」

情報を使いこなして「楽しく」生きる

人々の想像力が「内向き」になっている。これまでの研究を通じて、先生が感じていることだ。「以前は海外や未来に向かって豊かにふくらまされていた想像力が次第にしぼみ、自分の中にあるものに対してしか働かなくなっている。特に最近は、CGなどの映像技術が発達し過ぎて、受け手の想像力をスポイルしてしまっている印象があります。先の3.11についても、学生から〝津波の映像に迫力を感じなかった〟という声が聞きこえてきた。もし自分がこの映像の中にいたら、という想像力が働いていないんですね」

外に向かって想像力が働かなければ、充実した未来の自分をイメージして目標を設定し努力することも、より良い社会の姿を考えて行動することもない。向上心も行動力も湧き上がらず、多くの人にとって人生はつまらないものになるのではないか、と先生は懸念している。「そんな中で、メディアの情報をただ受け止めるだけではなく、自分なりの工夫をして加工し使いこなすファンやオタクは想像力に満ちた存在。ファンやオタクの研究を通じて、想像力を豊かにする文化の創造を呼び掛けたいですね」旅先の写真やフィギュア、たくさんのマンガ。「好きなもの」に囲まれた研究室で、先生は目を輝かせて語った。

辻先生の研究室。
多くの「趣味のもの」が先生を見守っている

■ 辻 泉（つじ いずみ）プロフィール

1976年12月17日、東京都生まれ。1995年、私立駒場東邦高等学校卒業。1999年、北海道大学文学部人文科学科卒業。2001年、東京都立大学大学院社会科学研究科社会学専攻修士課程修了。2004年、東京都立大学大学院社会科学研究科社会学専攻博士課程単位取得満期退学。博士（社会学）。松山大学人文学部社会学科准教授、中央大学文学部兼任講師等を経て現職。

■ 現在の研究テーマ

・各種メディアの利用実態に関する実証的研究

■ 高校生の頃の将来の夢は？

高校1年の時、手塚治虫さんのマンガ『ブラックジャック』に影響を受けて医者を志しましたが、「医学部に通わせる学費はない」と親に言われて断念。鉄道やアイドルが好きだったので、鉄道会社かマスコミ業界に勤務することをその後は夢見ていました。

■ どんな高校生でしたか？

いわゆる「オタク」。鉄道研究会に所属し、鉄道模型をつくったり、旅行して全国の鉄道を撮影したりしていました。男子校だったので、色気ゼロの「暗黒」の青春時代を過ごしましたが、この時期に日本全国を見て回り、いろいろな地方や社会があると知ったことが、今日の仕事にもつながっていると思います。

■ お勧めの本を3冊あげてください

(1)『「私」をめぐる冒険』浜田寿美男（洋泉社新書）
(2)『友だち地獄』土井隆義（ちくま新書）
(3)『日本の難点』宮台真司（幻冬舎新書）
自分自身はどんな存在か(1)、周りの人間はどんな存在か(2)、この社会はどんな状況か(3)という順に、身の回りの世界の「当り前さ」を見つめ直す。それが、社会について考えるスタートになるでしょう。

■ 特別な1冊

・『手塚治虫物語』（朝日文庫）
戦後における各種メディアの発達や変容を知る上で貴重な資料。そして、手塚治虫さんが寝る間も惜しんで創作活動に打ち込んでいた姿勢に学ばされます。いつも僕の傍らにあって、喝を入れてくれる存在です。

■ 高校生へのメッセージ

「想像力」を養ってほしい。何もかもが便利な現代で、放っておくと想像力は錆びてしまいやすいですから、意識して磨いてほしいです。受験勉強なんてどうでもいい。脳みそをムダ遣いせず、感動したり驚いたりという体験を多く積んでほしいと思います。内側から湧いてくるモチベーションがあれば、勉強なんかこれからいくらでも取り返せます。

辻先生のおすすめの本